

中島城

中島城については時代を隔てて2つ存在したと考えられる。まず、1つ目の中島城は「巴城」で、「ともえじょう」とも「ほじょう」とも読んだ。場所は新町井龍で、井龍は古来よりの通称字名が「羽城」、新町は「羽城ノ内奥屋敷玖」であったので整合しているようである。「羽城」は「巴城」から読み方をそのままに、地名の文字だけが変えられたと考えられる。「巴城」は1189（文治5）年に後鳥羽天皇の築建と言われ、1471（文明3）年に落城したという記録になっている。中島頭與五郎の数代が居城したようである。

もう一つの中島城は「由良城」である。永正年間（1504～1520）の頃、由良平八郎が築城したと言われ、その由良氏の城地は中島町後屋敷にあった。また、殿街道（荒井前）や馬取池などにも屋敷があったようである。城地は現在の後屋敷の馬取池（石川知秋様宅）周辺ということである。その辺りは土地が少し高くなっていて、以前は樹齢300年の大松があり遠くからもよく見えたそうである。そのようなことから「由良城」が中島で一般的に言われる「中島城」で、後屋敷に実在したことが推察できる。

1540年代から、中島城を巡り戦乱の世の戦いがあった。由良氏は、平八郎のあと由良太郎光兼、甚太郎光家、孫八郎光重と受け継いだ。世の中は戦乱の時代に入ってしまった。1547年、由良氏（吉良側）は勢力の拡大を狙っていた深溝城の松平大炊助好景（今川側）に攻撃されて落城してしまった。その後、今川側の板倉弾正重定が中島城主となった。この頃、桶狭間の戦い（1560）で敗れた今川義元の子、氏真は西三河の勢力回復をねらい、松平清康（家康の祖父）の妹を妻にしている東条城（吉良の駿馬）の吉良義安を駿府城に開封し、そこへ弟義昭を入れ、西条城（西尾城）へは牛久保の牧野新次郎成貞を入れて松平氏の勢力に対抗した。家康も今川氏の勢力が弱くなったので、三河を支配下にしようと、北の加茂郡を平定し、南の吉良の東条・西条へ攻撃した。1561（永禄4）年、中島城主の板倉重定は、吉良氏や浅井の荒川氏と一緒に今川方だったので、家康は深溝の松平好景に命じて中島城を攻めた。板倉重定はかなわず敗北し岡城へ逃げた。松平好景は、この戦いの手柄により家康から中島と永良を与えられ、好景の嫡男伊忠を中島城主とした。同年4月15日、東条城の吉良義昭は、酒井忠尚が守る上野城（豊田市）を急襲し松平氏に攻撃をかけた。家康はこれを聞き、松平好景の嫡男伊忠に上野城を救うように命じた。吉良義昭は伊忠が中島の半数で上野城に向かったことを聞き、手薄の中島城を襲った。それを深溝城で聞いた松平好景は50騎ばかりの兵で中島城へ急行した。それを吉良義昭は中島の町裏に300人余の兵で待ち伏せした。松平好景はそれとも知らずに中島に入り戦った。好景は名の知れた勇士で力戦奮闘し逃げる敵を追撃した。東条城近くまで攻撃したとき、吉良方の牟呂城の富永伴五郎が黄金堤南で挟撃した。当時、この地牲池革で挟撃を受けた好景軍は退却を余儀なくされた。逃れた好景は、善明村西ノ原で縦横に奮戦していた時に、馬の腹帯が切れ、鞍が動き馬から飛び降りたところを尾崎修理の矢が当たり深手を負い、山岡薬医により首を取られた。時に好景は44歳であった。この時、一族の34騎も討死した。その中には板倉好重（勝重の父）もいた（戦死碑が中島西町にある）。その後、吉良義昭は中島城を手に入れ、上野城の囲みを解き東条城へ兵を引き上げた。家康は好景が討死したことを嘆き、その子伊忠に継がせ深溝城を守らせました。これが「善明堤の戦い」と言われている。その後中島城は廃城になった。

【後鳥羽天皇（1180～1239）】

後鳥羽天皇（ごとばてんのう）は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての第82代天皇。在位は1183（寿永2）年～1198（建久9）年である。

本項は以下の資料を引用している。

[六ツ美村誌]

編者 六ツ美村是調査会
発行 六ツ美村是調査会
発行日 1926（大正 15）年 12 月 1 日
発行所 日新堂書店
印刷所 活版印刷所

[六ツ美風土記]

編者 岡崎市立六ツ美中部小学校父母教師会
監修 太田 満也
発行 岡崎市立六ツ美中部小学校父母教師会
発行日 1975（昭和 50）年 3 月 24 日
印刷所 あいち印刷株式会社

[六ツ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ツ美南部小学校 高須 亮平
発行日 2012（平成 24）年 3 月 31 日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社

[悠紀齋田中島案内]

編集人 牧 善丸、早川 治三郎
発行人 牧 善丸
印刷者 中村 角馬
発行日 1915（大正 4）年 6 月 5 日
発売元 牧 つね、早川 芳太郎



中島城付近東側より 20150801



中島城付近東側より 20150801

